

世界遺産「平泉」の拡張のための 類似資産調査（3）

—中国内モンゴル自治区「元上都の遺跡」—

佐藤 嘉 広[※]

1 調査の経過

岩手県教育委員会及び平泉町、奥州市、一関市では、「平泉の文化遺産」の「拡張」による追加登録を実現するために、平成25年度（2012）から5か年の共同研究計画を策定し、顕著な普遍的価値の証明に向けた取組を進めているところである（表1）。この計画にしたがって、平成25年度と26年度については、日本及びアジア都市史の観点において「平泉」がどのように位置づけられるかについて、研究者・専門家による研究集会を開催し検討を加えている。

表1 平成29年度（2017）までの岩手県及び関係市町共同の研究集会開催計画

	平成25年度 (2013)	平成26年度 (2014)	平成27年度 (2015)	平成28年度 (2016)	平成29年度 (2017)
研究集会テーマ等	日本都市史のなかの平泉	アジア都市史における平泉	アジアにおける平泉文化（仮）	浄土世界平泉—その範囲と構成—（仮）	「平泉」の拡張に係る国際専門家会議（仮）
開催地等 (予定を含む)	一関市 平成25年11月実施済み	奥州市 平成26年11月実施済み	奥州市 平成27年11月	平泉町 平成28年11月	一関市 平成29年

追加登録に当たり、「平泉」を「都市」（city, town など）として証明していくことが可能であるか、また、その方向性が有効な手段であるかについての議論はまだ十分尽くされていない段階であるが、2006年に提出した推薦書「平泉—浄土思想を基調とする文化的景観—」において、平泉を都市として説明しなかったにもかかわらず、2008年のICOMOS 評価書では、以下のように記載されている。

◆・・・「平泉が・・・浄土思想との深い関係の下に完成した」・・・ことについての証明は、・・・都市全体の配置（overall layout of the city）が庭園の理想的な配置へと反映したその在り方に依拠している・・・（p66R）

◆基準 ii）による評価が求められる。平泉の都市計画（town planning）、寺院と浄土庭園の配置は、アジア大陸から仏教思想とともにもたらされた造園思想が、どのようにして日本古代の自然崇拜や神

※ 岩手県教育委員会、岩手大学平泉文化研究センター

道を基礎に進化をとげ、日本固有の計画及び庭園意匠の思想へと発展したのかについて、さらなる根拠が示されれば、推薦資産の一部について基準 ii) の証明は可能・・・平泉は他の都市 (city)、特に・・・鎌倉に影響を及ぼした。(p68R)

上記研究集会の結果等については年度ごとに別途報告しているところであり（岩手県教育委員会ほか2014など）、最終的には、5か年が経過し一定の総括がされた段階で、推薦書案との関係が整理されていく予定である。したがって、現在進めている都市史、及び今後の議論の過程において「平泉」と直接比較が必要な他の都市遺産等の現地調査を毎年度継続して実施し、その成果を蓄積するものである。

平成26年度においては、前年度に開催した研究集会「日本都市史のなかの平泉」の議論をうけ、2012年に世界遺産一覧表に記載された元上都の考古学的遺跡（内モンゴル自治区シリントル盟ドロンノール県正藍旗に所在）の現地調査を主として実施した。

また、離宮に面する庭園を有する渤海上京龍泉府（黒竜江省寧安市渤海鎮）についての調査も実施しているが、この報告においては上都のみを取上げることとし、渤海上京龍泉府については、別稿を予定する。調査は、岩手大学平泉文化研究センターと共同で実施した。

2 資産概要及び調査参加者、日程等

(1) 概要

資産名称 元上都の遺跡 (Site of Xanadu) (図1)

面積 資産：25,131ヘクタール、緩衝地帯：150,722ヘクタール

(2) 案内者

正藍旗元上都遺址文物事業管理局局長 蘇伊拉氏

(3) 調査参加者

岩手県教育委員会事務局 佐藤嘉広

岩手大学平泉文化研究センター長 藪敏裕

岩手大学平泉文化研究センター教授 伊藤博幸

岩手大学平泉文化研究センター准教授 劉海宇

(4) 調査日程 (表2)

元上都及び渤海上京龍泉府の現地調査のほか、曲阜市において「曲阜の孔廟、孔林、孔府」と「平泉」を題材とした世界遺産の保存管理に係るワークショップ等を実施した。

表2 元上都の考古学的遺跡ほかの調査日程

月 日	調査視察行程	宿泊地
8月7日	羽田空港発、北京経由、牡丹江着	牡丹江
8月8日	渤海上京龍泉府及び興隆寺調査	牡丹江
8月9日	牡丹江発、北京経由、内モンゴル自治区正藍旗着	正藍旗
8月10日	元上都遺跡調査	正藍旗
8月11日 ～ 8月16日	山東市、孔子研究院、山東考古学研究所等と世界遺産の保存管理に係るシンポジウム (UURR 事業に基づく)、など (8月16日北京発、羽田着)	済南 曲阜 北京

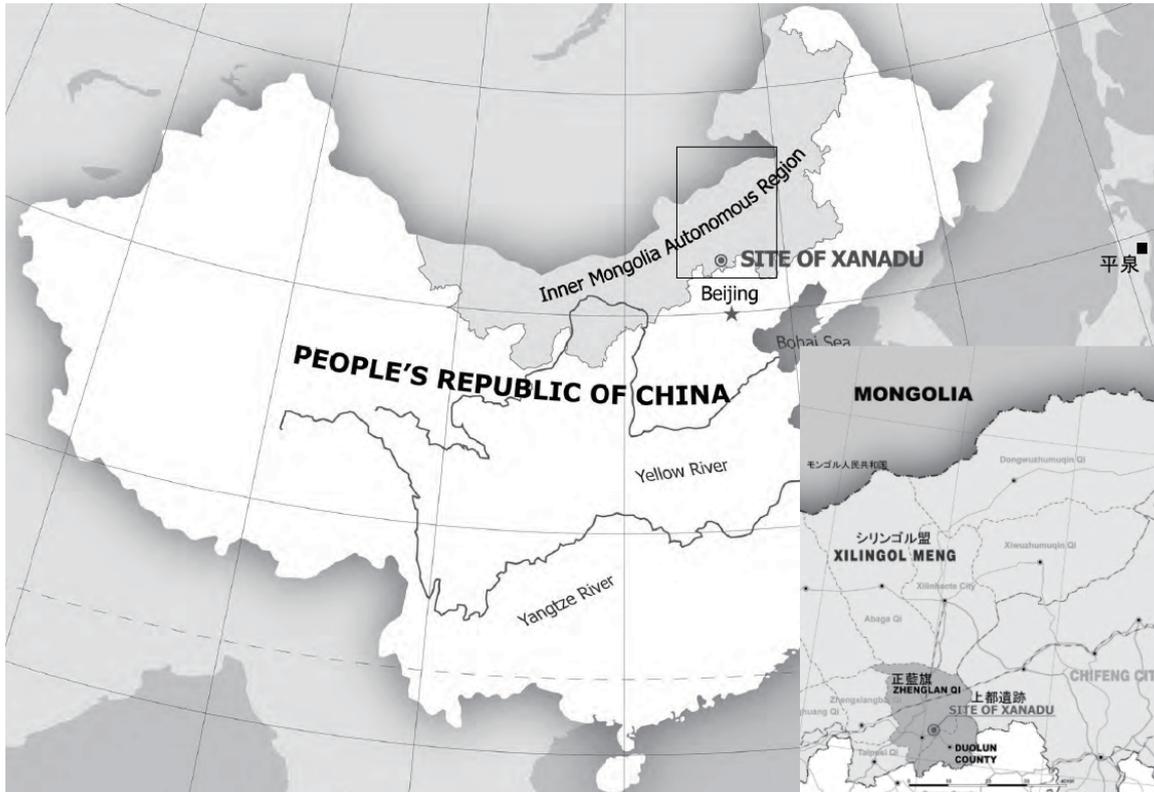


図1 元上都の遺跡の位置（右隅地図は枠内の拡大）

3 遺跡の概要

(1) 歴史と経過

元上都の遺跡は、13世紀～14世紀にマルコ・ポーロ（Marco Polo）によって Chan-du、オドリック（Odoric of Pordenone）によって Sandu などと記され、ヨーロッパに伝えられている。1256年、憲宗の弟のフビライ・ハンが劉乗忠とともにドロンノール（Duolun）付近に居城を築き開平府とし、憲宗死後の1260年、そこで即位し首都とした。1264年には上都と改称した。1267年には燕京に中都城（のちの大都、北京）を築いて首都とし、1271年に元を建国。1279年には南宋を滅ぼして中国を統一した。一方、上都には、留守司が置かれ、1268年には上都路総管府としたが、一般に夏期における元皇帝の都として知られている。1358年、紅巾の乱によって上都は焼き払われた。その後、明の初期に開平衛が置かれたこともあったが、概ね廃墟の状態であるに伝わっている。

1872年には英国大使館員ブッシュェル（S. W. Bushell）、1893年にロシアのポゾドニエフ（A. Pozdnoneiev）、1925年にアメリカの地理学者インペイ（I. Impey）によって小規模な踏査が行われてきているが、学術性の高い本格的な調査は、1937年の東亜考古学会によるものであった（東亜考古学会1941）。¹⁾

(2) 現状

遺跡は、正藍旗上都鎮の中心部から北東に20キロの草原地帯に立地している。入口のある遺跡南端まで平坦な舗装された道路が通じていて、公共交通機関はないが遺跡へのアクセスは容易である。現在は、来訪者用の広大な駐車場も整備されている。世界遺産記載後の年間来訪者数は30万人という。今回の調査では、蘇氏の計らいにより、宮城域及び皇城域については一般観光用移動車両を利用し、

外城域及び近郊域については四輪駆動車を利用した。

遺跡への入口は南側近郊域 (south neighbourhood) 南端にある。北に宮城 (palace city) 南門方向へのアクセス路が延び、城域を越えて遠方かなたに、山頂にオボ (敖包、Obao) が築かれる丘陵地を望むことができる。入口付近に管理施設としてのゲルが集中するが、城域及び近郊域を含め、資産内中心部四方には、復元構造物等はほぼ確認することができず、広大な草原の光景が広がっている状態が観察される。哈登台 (Hadat) オボの北側には、羊等が放牧・飼養されている範囲がある²⁾。

(3) 資産の境界 (図 2)

東の境界が大 (Eej) オボの東にある丘陵から稜線沿いに南に向かい、上都川 (Xandii Gool) の堰堤、砧子山 (Zenzi Hill) の北東から稜線、そして南砲台 (South Battery Hill) の頂点に至る。南の境界は、そこから Tumet (烏蘭台?) オボへ。西の境界がそこから額金 (Ejen) オボの稜をとって葫芦蘇台 (Holostai) オボへ。そして北の境界がそこから、山の稜線をとおり、查干 (Oagan) オボを経て、烏和尔沁 (Uhreqin) オボ森林地帯の南の山麓線に沿って大オボの東の丘陵に戻る。

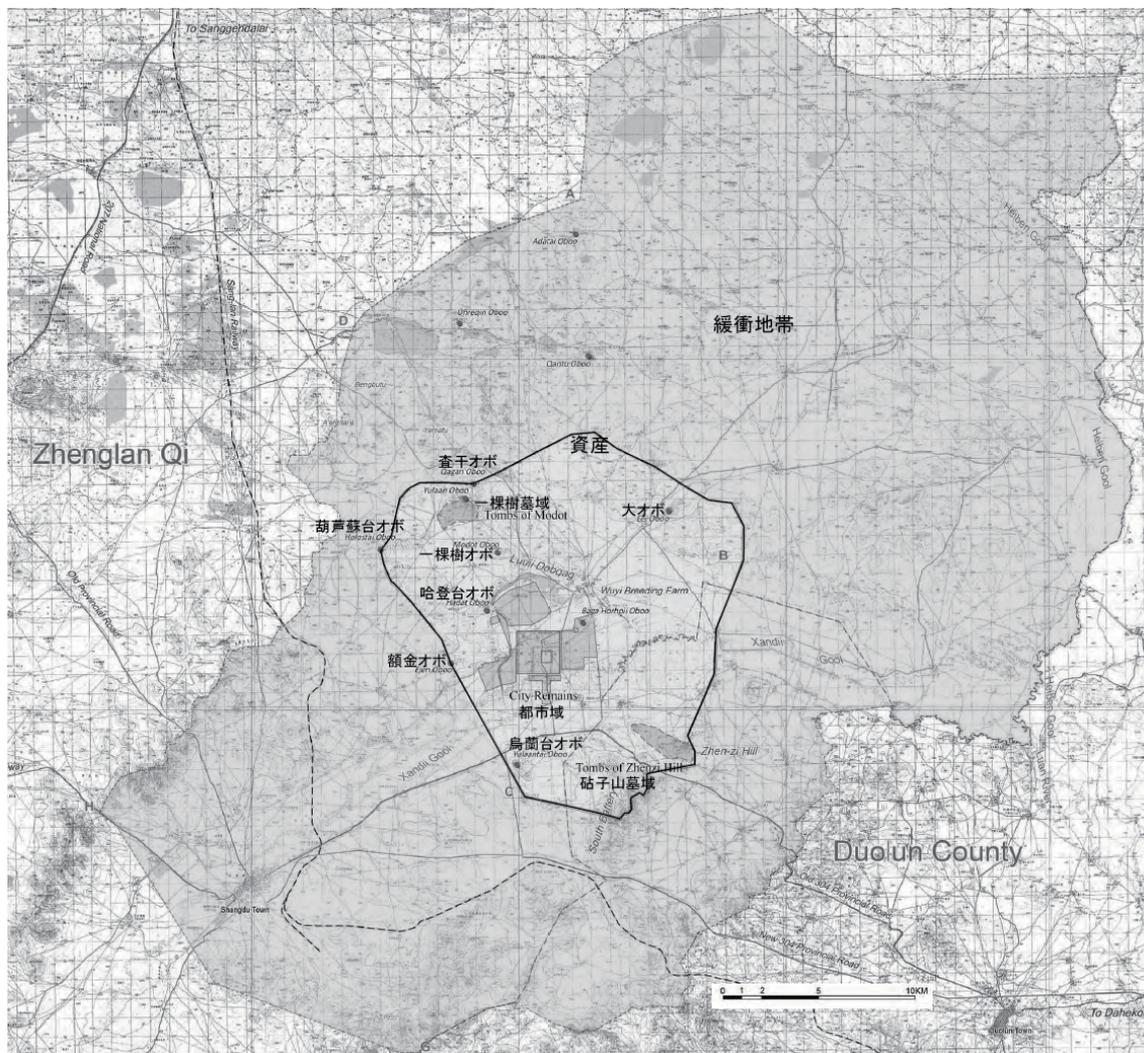


図 2 資産と緩衝地帯の範囲 (資産：濃い実線内、緩衝地帯：資産周囲の薄い網がけの範囲)

(4) 構造 (図 3)

世界遺産の資産として保護されている範囲は以下のとおりである。

都市域 (City of Xanadu) :

宮城 (Palace city)、皇城 (Imperial city)、外城 (Outer city)
 東側近郊域 (East neighbourhood)、西側近郊域 (West neighbourhood)、
 南側近郊域 (South neighbourhood)、北側近郊域 (North neighbourhood)
 流水制御工事 (Water control works)：鉄幡竿運河 (Tiefan'gan Canal)
 墓域 (Tombs)：砧子山墓域 (Tombs of Zenzi Hill)、一棵樹墓域 (Tombs of Modot)

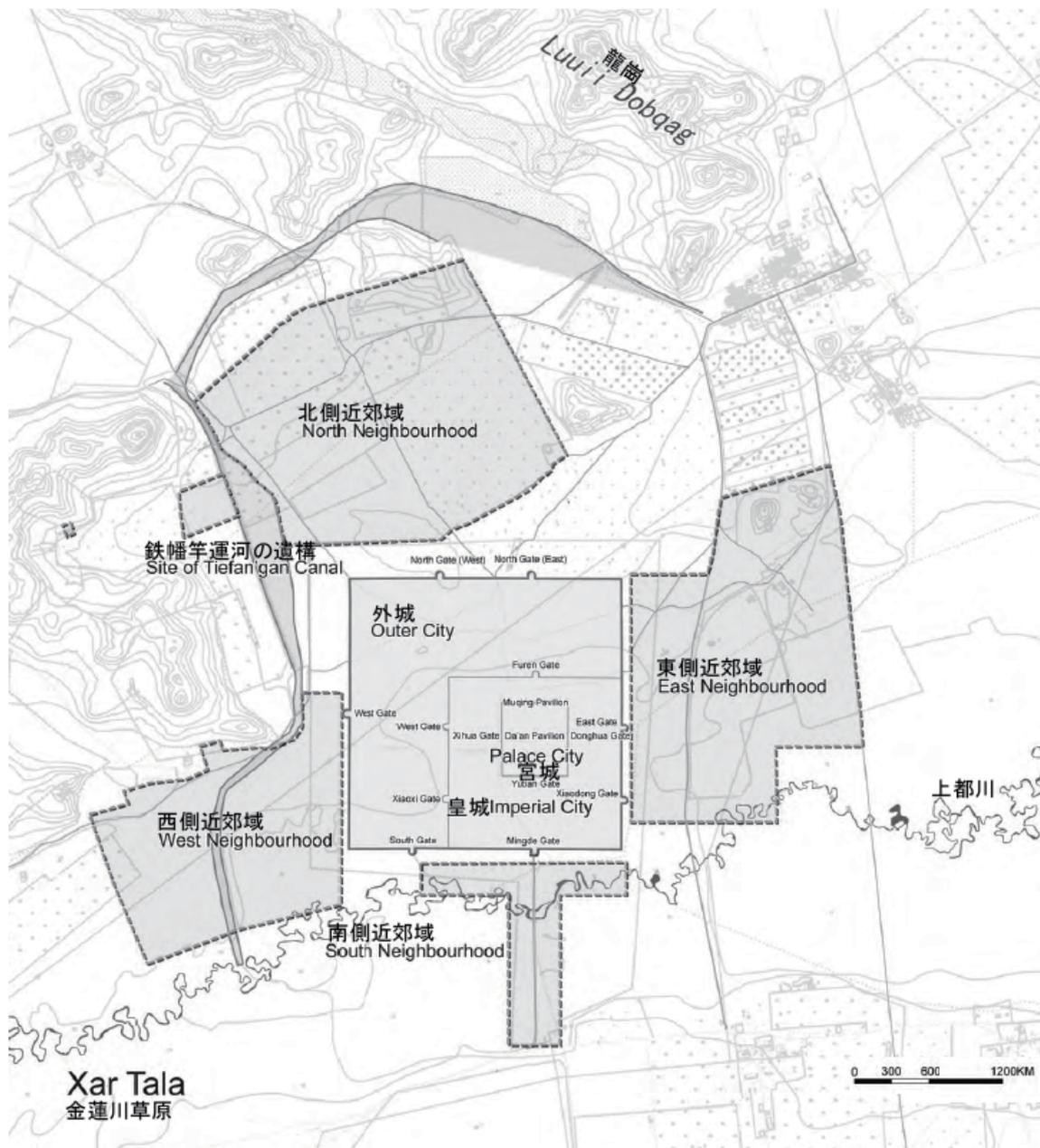


図3 資産範囲の区分

文化的セッティング (Cultural Setting)：敖包 (Oboo)

自然的セッティング (Natural Setting)：金蓮川草原 (Xar Tala)，上都川 (Xandii Gool)，Luu'ii Dobqag

以下、個別に概略を記す。

ア 都市域

(ア) 宮城

宮城は上都の中心で、東西542メートル、南北605メートル、面積32ヘクタール。四周に城壁（現存高5メートル、基底幅10メートル）が廻り、東壁、西壁、南壁のほぼ中央に城門が、四隅には監視台を有している。城壁の外側には堀（幅8メートル、深さ2.1メートル以上）が構築され、灌漑と防衛の役割を担った。城壁内には、宮殿遺構が密集している。

宮城内には40以上の基壇遺構が現存している。中心的な道路は規格性が高く、中央の宮殿を結節点として、東門と西門及び南門をT字状に結んでいる。多くの建物は東西路の北側に配置され、方形、長方形、円形の基壇を持ち、中庭を有している。東西路の南側では建物基壇は少ないものの、それらは同様に中庭を有している。歴史記録によれば、22の宮殿や楼閣の存在が知られている。現段階において、記録と考古学的遺構との対応が確実なものは、中央部における最大の方形基壇遺構である大安閣や、北辺城壁中央部分の穆清閣など9カ所程度とされ、それ以外の遺構と記録との対比については、将来の発掘調査等にゆだねられている。

T字状道路以外の小規模な道は、建物群と同様に自由に配置されている。そのほか、城壁と堀との間に、環状路が巡っている。

(イ) 皇城

皇城は上都の都市域の主要な範囲を構成している。東西1,410メートル、南北1,400メートル、面積164ヘクタールで、おおむね方形である。

皇城内には多くの役所及び寺院があり、外城のそれらに比して重要な施設とされる。北壁と南壁の中央に1か所ずつ、東壁と西壁に2か所ずつ、計6つの城門を有している。監視台がそれぞれの門の外側に置かれた。城壁から張り出す稜堡や高い四隅の砲台から、軍事的防衛機能を強化していることがうかがえる。城壁外側の堀も灌漑と防衛の機能を有している。城壁高は6～7メートル現存し、基底部幅は12メートル、上端では幅5メートルである。

四辺の城壁の外側には、それぞれの辺に6か所ずつ、全部で24か所の稜堡が台形状に作られている。高さ5.8メートル、基底部幅12メートルで、5.4メートル外側に張り出している。それぞれは、110メートルから180メートル離れて配置されている。四隅の突出部には砲台が築かれ、砲台でつながれる東壁と南壁の内側には、市内に登るための二つの坂道がある。皇城の砲台は宮城の砲台よりも大きい。

皇城の外側もまた堀によって囲まれる。東壁及び南壁の外側では、幅20～150メートル、西壁及び北壁の外側では8～10メートルになる。幅の形態と振幅は、北西が高く、東南が低い地形による洪水の状況と関連する。

皇城内の道路幅は一定しないが、地形にしたがって対象的に配置され、主要路とそれ以外の道路は明確に区別される。主要な南北路は3本あり、そのうちの一つは幅25メートルで、皇城南門に通じている。その東西には、350メートルずつ離れて、15メートル幅の道路が城内の南北を結んでいる。東西の主要路もまた3本あり、城門をつないでいるが、最北の東西路は宮城域で遮断されている。このほか、小規模な街路が中央から南側にあり、さらに小さな街路は建物の周囲に不規則に分布している。

歴史記録によって、皇城内には多くの寺院や僧院が築かれていたことが知られていて、現在、東西路に沿って20以上の基壇を確認することができる。発掘調査等により記録と同定されている遺構は5か所であるが、特徴的なのは城内の四隅に近い部分に宗教施設が配置されることである。すなわち、北東隅に仏教禅宗寺院である華嚴寺（Huayan Temple）、北西隅にラマ教寺院である乾元寺

(Qianyuan Temple)、南東隅に儒教寺院 (Temple of Confucius、文廟 (孔子廟))、南西隅にラマ教寺院と考えられる開元寺 (Kaiyuan Temple) が造営されていた。そのほか、宮城西南隅外側の遺構が道観である長春宮 (Chongzhen Palace) 跡とみなされている。これらの宗教施設は、規模に大小の幅があるが、方形もしくは長方形の外壁が巡らされる。また、現段階では遺構との対比が完了していないが、イスラム教の施設が記録されているほか、ネストリウス派キリスト教が受容されていたことが知られている。これらは、元政権が宗教に対して寛容であることを示す物証としてあげられる。

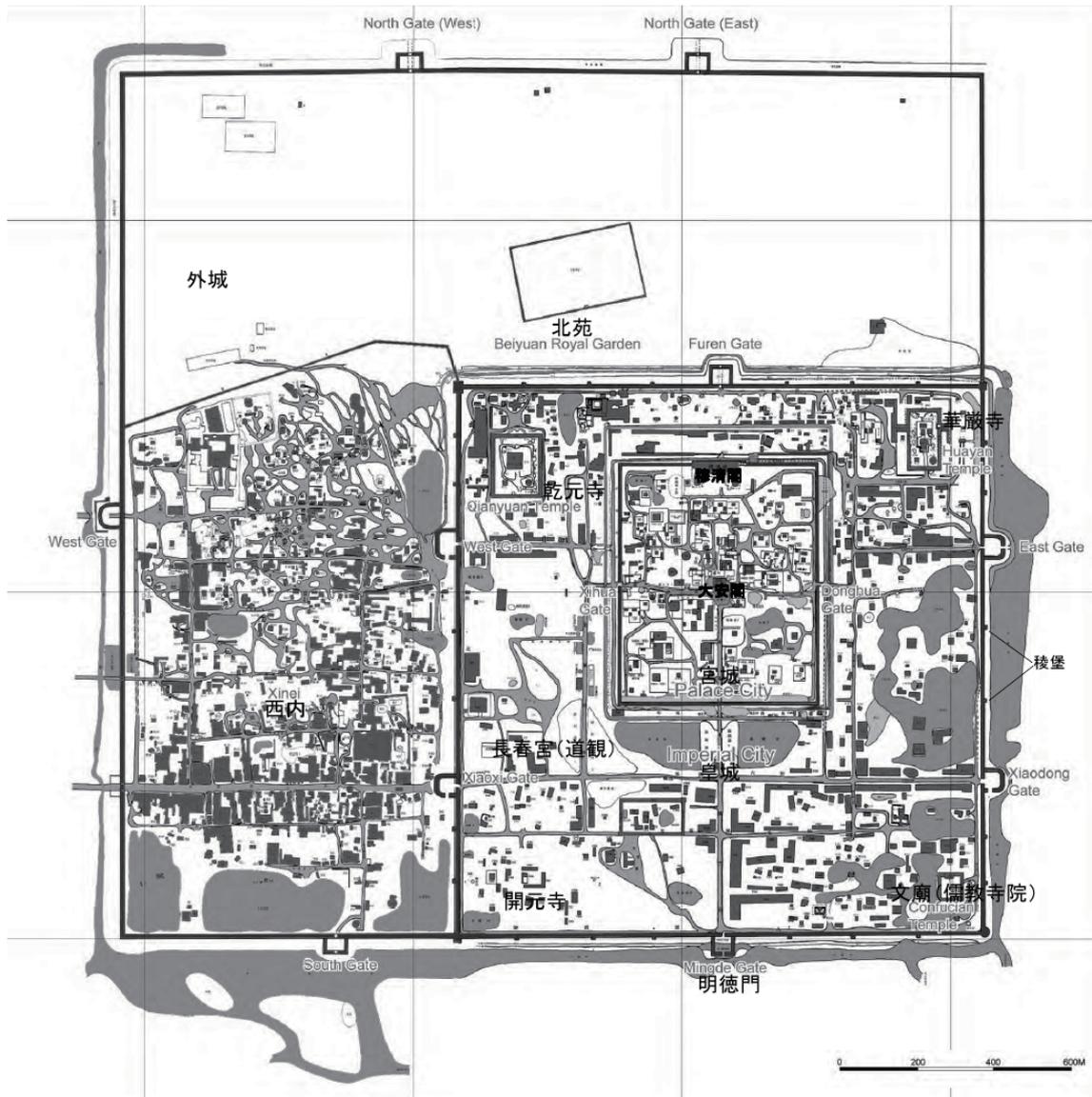


図4 城内の配置 (主要施設、道路など)

(ウ) 外城

外城は皇城の西側と北側が後に拡大したもので、面積は288ヘクタール。西壁の南北長が2,220メートル、東壁と南壁がそれぞれ815メートル、820メートル北と西に延長されている。そのため、平面形がL字状を呈している。東西に延びる弧状を呈する壁によって区分され、その北側は遺構がほとんどない北苑 (Beiyuan)、多くの遺構が所在する南側が西内 (Xinei) と呼ばれている。城門は、北壁に1か所、西壁と南壁にそれぞれ1か所作られる。西壁及び北壁には監視台が敷設されるものの、

砲台や稜堡はみられない。堀もまた、西側にのみ確認されていて、北西部分で幅13メートル、深さ2.5～3メートルを測る。

道路遺構は西内にのみ確認され、北苑には認められていない。西内の南半部は3本の東西路と2本の南北路によって区画され、小規模な街路によって建物群が結ばれている。北半部の道路は不規則に密集していて、ふたつの東西路が門と回廊の補助的な役割を果たしている。

北苑は元の王室によって、異国的で希少な花や鳥獣が栽培・飼養されていた。考古学的調査によって確認された建物や街路はなく、唯一、ほぼ中央部に、東西315メートル、南北195メートルのひし形の庭が確認された。この区画で、希少な鳥獣類が飼養されていたと考えられ、古い木陰に囲まれていることから、この庭がモンゴル貴族と高級官人によって管理されていたと考えられる。

西内の北側は、モンゴル族が重要な会合のために天幕を設営した場所で、フビライによってモンゴル族の伝統として設置された、黄色い天幕を意味するイラ・オールド (ira ordo) として記録に頻出する場所とされる。ここでは、モンゴル族の重要な祭礼である Jama-yan が行われた。このことは、考古学的調査からも証明されている。

一方、西内の南側には、特に東西路の両側に多くの建物遺構が存在する。そこでは、長方形を呈し、石によって壁が構築される大きな区画 (南北320メートル、東西168メートル) が検出されている。区画中央北側にある建造物の南北は通路によって結ばれ、通路の両側には廊がある。建物の南北には、多くの家屋がある。

以上の城域 (宮城、皇城、外城) は、正確に南北軸をとる。

(エ) 東側近郊域

東側近郊域は、東西1,300メートル、南北2,000メートル、面積400ヘクタールで、北部の丘陵域と南部の平野を含んでいる。丘陵の急峻な地形から北部では建物がまばらで、一方南部は平坦な湿原である。この領域には、モンゴル貴族、官人、巡礼者などが集まっていた。ゲルの設営位置は街路に沿っておらず、遊牧民の生活習慣の自由な様式を示している。建物群は、人工的な高台上に東西に並んでみられる。それぞれは近接しているが、不規則に分布している。建物の大部分は、一定規模の中庭を持つ小規模な市民の家、役所、貯蔵庫である。

(オ) 南側近郊域

南側近郊域は、その南側を区画する上都川の自然堤防上に立地している。南北800メートル、東西1,500メートルで、面積は94ヘクタール。この範囲に、大都に通じる皇帝と官人の主要な通路である南門の外側の街路があり、それに沿って漢様式の建物が建てられていた。発掘によって出土した日常的な土器や陶磁器などから、この地域には、食堂、宿泊施設、商店などの商業的施設があったと考えられている。

(カ) 西側近郊域

西側近郊域は、Hadengti オボが北西方向に位置する。南北2,200メートル、東西2,000メートル、面積は266ヘクタールに及ぶ。東西のほぼ中央に南北方向に鉄幡竿運河 (Tiefan'gan Canal) がある。狭い北側には少数の政治的建物があり、平坦な南側には家屋と中庭遺構が存在する。中庭の規模は東側近郊域よりも小さく、また不規則でもある。桓州駅 (Huanzhou Posthouse) から北京やカラコルムに通じる西門外側の街路は、上都の交通と交易の動脈で、そのため、西門の通りには商人が集まり、多くの商店や商品庫が立ち並んだ。北西方向のオボの南東緩斜面には大規模な穀物庫も確認されている。この範囲は、上都における交易と商業の重要な場所であったと考えられる。

(キ) 北側近郊域

北側近郊域は、外城北壁のさらに北部にある一棵樹山麓までの範囲で、東西ほぼ2,500メートルの広さで、面積は460ヘクタール。その東部は、早い段階で農地になっていて、遺構は不明である。西側は西側近郊域に接し、多くの建物遺構が現存する。北側には800メートルの長さを持つ小さな単層の建物遺構が、北側の丘陵に沿って60メートル幅で縞状に分布する。調査によって、穀物庫、兵舎、大きな中庭の所在が判明している。歴史記録によれば、500人の兵士が皇帝の警護にあたり、15,000人の漢人兵士が山の背後に駐屯していたと伝えている。

(ク) 鉄幡竿運河

鉄幡竿運河は、洪水によって危機にさらされた上都の治水のために造成されたもので、上都の歴史上重要な役割を果たしている。運河の名称は、仏教的思想に基づき、上都北西部の丘陵に鉄の幡竿を立てて洪水を制御しようとしたことに由来する。

運河は上都北部の丘陵裾に始まり、上都川まで延びている。上都都市域から2キロ北西にある哈登台オボと都市北側の丘陵の間に、延長約1キロ、高さ2～3.5メートル、基底部幅5.2～5.8メートルの堰堤が構築されている。運河全体の延長は約6キロ、幅は50メートルである。

(ケ) 墓域

1990年以降、上都周辺の発掘調査が進展し、墓域についても明らかになってきた。墓域は、基本的に二つの地域に分かれる。

一つは、砧子山墓域（292ヘクタール）で、漢族の墓である。都市域から9キロの東南部丘陵地帯に約1,500基が分布する。墓郭は大部分が方形もしくは長方形で、一重壁のもの、内壁と外壁が巡るもの、南壁の内側にさらに東西壁が作られるもの、の3タイプがある。墓郭内には、通常、一つの墓が設置されるが、複数の墓を持つものもある。半数以上の墓では様々な副葬品を伴っている。

もう一つが一棵樹墓域（215ヘクタール）で、モンゴル族の一般的な墓である。都市域から北西12キロの丘陵緩斜面に分布する。多くが長方形の石壁を持つ墓が分布する区画と、それ以外の区画とがある。盗掘が行われているために副葬品が少なく、またそれらの原位置も明らかではない。

これらの墓域は、上都都市域の歴史的変遷と密接に関わっていて、上都におけるモンゴル族と漢族による多様な社会とそれぞれの生活様式を示している。それぞれの出土遺物は、当時の居住者の生活を表している。

(コ) 自然的セッティング

元上都の遺跡は、都市の地理的環境の特質を反映する草原の光景を特徴づける。水と草原を含む自然的セッティングの要素は、金蓮川草原、上都川、龍崗（Luuii Dobqag）などが、上都の構築と繁栄における人間と土地との関係を反映し、上都の基本的環境を構成する草原、ステップ、森林草原、そして湿原を含む草原景観を特徴づけ、砂丘、湖、川、泉、榆の森、そして連続する低い山並みが、モンゴル平原の一方の側の砂漠地帯に所在するカラコルムとの対応で、風光明媚な草原景観として、草原の首都としての上都の重要な要素となっている。

(サ) 文化的セッティング

上都都市域の周辺は、モンゴル文化の民族的慣習によって強く特徴づけられている。古代のオボ及びその信仰、ナーダム（Naadam）祭礼とその他のモンゴル族の伝統的活動がここで行われ、それらはすべて、祖先崇拜における山岳信仰の独特の物証となっている。

オボは、モンゴル語で積石塚を意味していて、中国北部の草原地帯において最も普遍的で長い歴史をもつ人工的構造物であり、道標や宗教的対象として用いられ、北アジア遊牧民の自然神信仰とシャマニズムによる祖先神信仰の伝統的宗教心と密接に関係している。

上都都市域周辺のオボは、山の頂部に作られた。長い間、山はモンゴル族によって、祖先の起源であり生きている場所であると考えられてきた。そのため、モンゴル遊牧民にとっての良好な供犠の場であるばかりでなく、シャーマン崇拜としての「山岳信仰」の特別な証拠をもまた提供している。

上都都市域の周囲6～8キロに、12のオボが現存している。それらは、直径が35～45メートルで、高さが8～10メートルのものが一般的である。

4 ICOMOS による評価（表3）

ICOMOS は、締約国が説明した上都の顕著な普遍的価値を以下の6項目にまとめている。

- (1) 上都都市域（Xanadu City）の遺跡は、最古の、しかも独特の配置を持ったまま最高の状態で保存されていて、元の首都のなかでは最も長く使われていた。
- (2) 遺跡は、その両文化の都市形態と出土品によって、モンゴルと漢文化の独特の融合の証拠を示している。
- (3) これは、（元朝の）特別の政治体系と社会構造の興隆と没落についての、唯一の手つかずの物証である。
- (4) そこは、フビライ・ハンが権力を拡大した場所であり、彼はそこから中国を征服し、モンゴル帝国を北アジア全体に拡大した。
- (5) 同時代の説明及び後世の旅行記録から、上都は文学作品及び他の創造的作品に思想的影響を与えた。
- (6) 上都において行われた宗教論争によって、北東アジアにチベット仏教が流行することとなった。

ICOMOS は、基本的に推薦書の内容をほぼそのまま評価している。特に評価が高いとみられるのは、

- ・遊牧民であるモンゴルと漢文化の同化が図られた独特の試みであり、
- ・そこからフビライ・ハンが元朝を設立し、
- ・仏教と道教の宗教論争が北東アジアへのチベット仏教の拡散をもたらした、

ことである。

以上から、顕著な普遍的価値の言明が導かれるが、「推薦書」とICOMOSによる評価には、多少の相違が認められる。

「推薦書」：上都の遺跡は、元朝のすべての首都の中で最も古く最も長期にわたり、最も独特の配置を伴う首都として最も良好に保存されている。かつての輝く文明を保存している遺跡として、13～14世紀の歴史環境のもと、勇猛・勇敢ですばやい騎馬民族が、どのように、高度に発達した農耕民の文明を征服し、その文化を同化し、その文化に転換したか、そして、この広義の文脈において、彼らは自身の信仰や文明を固守し、支配者層の伝統・影響・慣習及び政治的必要性のために、彼らの本源地との結合を維持した。遊牧民と農耕民の文化の共存と融合を特徴とする結果としての「二面文化的」都市計画の特徴は、人類文明の歴史における民族文化の融合の独特の事例であり、世界文明と都市計画の歴史において独特の役割を果たした。それはまた、特別の政治体系と社会構造の興隆と没落についての唯一の手つかずの証拠でもある。フビライ・ハンが権力を獲得したその場所が100年以上も続く元朝の権力の中心として、主要な政治的・宗教的・文化的・軍事的連続が観察され、それらは中国及び世界の歴史に重要な影響を及ぼした。多くの考古学研究の可能性を有する良好に保存された遺跡と、異なる言語による豊富な歴史資料は、永遠の魅力を与えている。そのことによって、この遺跡が、同時代及び将来にわたる人類の文明・文化の進化にとっての重要な意義を教え、明らかにして

いる。

ICOMOS の評価：上都の遺跡は、北東アジアにおける遊牧民と農耕民の文明の衝突と相互の同化を証拠づけている文化融合を特徴とする草原の首都の遺跡である。モンゴル平原の南東端に位置することから、フビライ・ハンの最初の首都となり、のちには元の夏の首都となった。都市の遺跡と関連する墓域は草原ステップに位置し、北に山地・南に川という伝統的な中国の風水原理に基づく南北軸によって決定されている。

上都から、フビライ・ハンの騎馬軍団が中国の農耕文明を統一し、元朝が北アジアに勢力を拡大する間に、部分的に後者の文化に同化した。一部が外城に囲まれる宮城と皇城という上都の平面形は、遊牧民の野営地と王室の狩猟地の証拠をもとりこんで、この文化融合の独特の実例となっている。都市を保護するための巨大な流水調整の証拠は、鉄幡竿運河の遺構として現存する。フビライ・ハンが権力を構築した場所が、宗教的論争や、その記録が後世に影響を与えた外国旅行者の歓楽の場であったことから、そこは世界における伝説的地位を獲得し、そこからチベット仏教が拡散することとなった。

表3 元上都の世界遺産評価基準等の「推薦書」とイコモスの評価の比較

	推薦書	イコモス評価書
評価基準 ii	上都の遺跡は、北方の草原モンゴル人の遊牧民の生活様式と、「北に山、南に水」という立地を好む中国中央における農耕民漢族の定住生活の慣習が統合され、征服と同化の過程において、異なる文明の生活様式と価値観の相互の影響と統合を示している。そのような同化がもたらした思想、制度、宗教、及び経済体制は、北部の草原地帯、古代の中国の広大な領域を超えて、深い影響を与えた。	上都の遺跡の立地と環境は、モンゴル族と漢族の価値観と生活様式を表す。都市の遺跡は、二つの民族の統合を示す都市計画の型 (urban planning pattern) を表す。モンゴル族と漢族の思考と制度の組合せによって、元王朝は、その当時知られている世界のかなりの範囲にわたって支配することが可能となった。上都の遺跡は、異なる民族が関わった統合的都市計画 (integrated city plan) の独特の事例である。 ◇信仰体系の融合は、上都から大都へ、そして東アジアを横断して朝鮮半島と日本に、都市の形態と機能の変化をもたらした。
評価基準 iii	上都は、1世紀以上に及ぶ、征服制度と独特の文化現象の興隆と没落を示し、相互に矛盾することがある3つの歴史的条件によって生まれた。すなわち、偉大な征服者の最高の規則、征服された文化と政治体系への同化と転換、そしてもともとの文化的伝統を固守し維持することにおける征服者の決心と努力である。その一方、上都遺跡は、すべての元朝の首都遺跡の中で、最も早く、最も長く、最も特別な構造をもち、最も良好に保存されている。中国中央の農業地帯と北アジアの牧畜地帯の遺構地帯に特徴的に位置していることから、遊牧民と農耕民の衝突と融合の期間に実現した独特の両文化性を反映し、その後の衰退によって、遊牧民が彼らの伝統的生活に戻っていった。	上都の遺跡は、元の支配者フビライ・ハンが、征服した文化と政治体制への同化・転換を果たし、被征服者のもともとの文化的伝統を固守し維持する決定と努力をした、最高の統治のたぐいまれな物証である。 ◇元朝文明のたぐいまれな物証。
評価基準 iv	上都は農耕文明と遊牧文化の精髓を組み入れ、フビライ・ハンが王朝の統治を行った重要な段階を説明し、遊牧民を代表して農耕民を統治した顕著な事例である。統治の戦略は、遊牧民と農耕民の文化の共存と融合を特徴づける都市の形態を発生させ、そのことは、世界の文明史及び都市計画と設計の歴史における独特の意義をもたらした。	上都の遺跡の立地と環境は、その都市形態とともに、遊牧民と農耕民の文化の融合と共存を示す。上都における中庭を伴う漢族の都市と、元朝のモンゴル族の生活様式にとって必要な景観との組合せは、人類史にとって重要な段階を示す都市配置 (urban layout) の顕著な事例を生み出した。 ◇外城の中に禁苑を含み、草原と湿原によって囲まれる都市の配置は、漢族の都市計画を元朝の生活様式に必要な特徴とを結合したものである。

評価基準 vi	<p>上都はフビライ・ハンによって13世紀ユーラシアの歴史を作った元朝を起こした場所である。都市は、ヨーロッパに大航海時代をもたらしたマルコ・ポーロの旅行記と直接結びついていた。また、13世紀における仏教と道教との間の偉大な論争が行われ、そのことがアジアの宗教史を変化させた。遊牧民の生きている伝統である「オボ信仰」は、推薦資産の遺跡で現在なお行われている。そして、古典詩の主題として、上都一歡樂の園一は、世界の文学、音楽、建築、その他の芸術分野に広範な影響を与えた。</p>	<p>上都の都市は13世紀における仏教と道教間の壮大な議論の舞台となり、そのことが、チベット仏教を北東アジアに拡散させることとなった。</p> <p>◇ ICOMOS は、上都がシルクロードに位置することで西洋に知られることになり、マルコ・ポーロによる著作によって後世の創造的作品に影響したものの、評価基準 (vi) による適切な証明とは考えていない。仏教と道教との間の宗教論争の場となったことが適切な証明である。(皇城の北東隅に今日でも見られる華嚴寺の遺構において宗教論争が行われた。)</p>
完全性	<p>上都の都市が1430年に廃棄されたことから、その遺構が人間活動によるかく乱を受けずに残ったため、広大な遺跡としてよく保存されている。25,131.27ヘクタールの資産域が、4つの人工的な遺産の組合せとして統一的である。それらは、13世紀と14世紀に造られ使われた上都の都市計画全体(宮城、皇城、外城を含めて)、都市城門の外側にある近郊域、鉄幡竿運河、墓域である。それはまた、遊牧文明と農耕文明の様式を統一している計画の特徴をも有している。150,721.96ヘクタールの緩衝地帯には、上都の歴史環境、すなわち都市のセッティングに決定的な自然環境の要素、それらの空間的關係、草原の光景：特に美しい金蓮川草原を含む4つの型式の共存である。遺跡の文化的環境もまた同様に維持されている。すなわち、都市を囲む山の頂部に位置する多数のオボ、オボ信仰を含むオボ関連の生活伝統、ナーダム祭礼、地域住民の遺跡に対する尊敬と畏敬が、資産の精神的影響が推薦資産によって統一的に継承し伝達されている。これらすべてが上都遺跡の高い完全性を証明する。</p>	<p>上都の遺跡は1430年に廃絶した。現在、広大な考古学的遺跡は草原に覆われ、13世紀と14世紀に造られ使われた上都の都市計画 (urban plan) と都市の遺跡を保護している。宮城・皇城・外城の外郭は、中国中央の伝統的都市計画 (traditional urban planning) とモンゴル族の部族会合と狩猟のための配列をともに示していることが、宮殿や寺院を示す土の高まりとして明確に認識でき、それらのいくつかは発掘され、記録された後、埋め戻されている。門外の近郊の遺構である鉄幡竿運河と墓域は、すべて自然・文化環境の域内である。後者は都市の位置決定に重要な自然的要素、北に山一南に水、さらには草原の光景の現存する4つの型、特に河川湿原に関係する金蓮川草原を保護している。上都の遺跡は、その景観において明確に理解されている。</p>
真実性	<p>上都の遺跡の真実性は、考古学的発掘と歴史記録の両面から証明されている。現存する遺跡と遺構は、13世紀と14世紀の形態・材質・伝統的建築技術・立地に関して、基本的特徴を示す。それは、首都の設計・歴史的配置・建物材料などに関するモンゴル族と漢族間の交流の真実性を表現している。墓域は、上都におけるモンゴル族と漢族の生活に関する歴史記述を裏付けている。上都の明德門と墓域を除いて、基本的に改変は加えられていない。同時に、モンゴル平原の東南の境界の地理的環境と草原の光景が良好に保存され、草原の首都の環境の特徴と精神的感性の真実性が維持されている。オボとオボ信仰は、シャマニズムを保持して伝承され、現在なおモンゴル族の自然への感情の真実性を体現している。それゆえ、推薦資産は高い真実性を示している。</p>	<p>考古学的発掘と歴史記録は、首都の設計・歴史的配置・建物材料に関するモンゴル族と漢族の間の交流を表す資産としての真実性の証拠を保持する。墓群は、上都におけるモンゴル族と漢族の生活に係る歴史資料を裏付けている。明德門 (Mingde Gate) と皇城の東外郭の修復を除いて、構造物への補修はほとんどなかった。地理的環境と草原景観は手つかずで、今なお草原の首都としての周辺環境と空間的感性を伝えている。</p>

顕著な普遍的価値の属性

イコモスは、以下の6項目について、顕著な普遍的価値の属性であるとしている。

- (1) モンゴル族の生活様式にとって必要な草原と湿原の環境であると同時に、北に山、南に川という伝統的な中国の風水を示している地理的・自然的セッティング。
- (2) 都市の配置、漢族とモンゴル族の居住の統合、及び都市における多くの宗教の受容を示している寺院などの構造物の考古学的遺構。
- (3) 漢とモンゴルの文化を示す墓域。

- (4) 都市と近郊域の洪水を制御するための鉄幡竿運河と他の建造物の遺構。
- (5) 持続しているシャーマン信仰の伝統とそのチベット仏教との関連によって示される、上都の遺跡が関連している精神的文脈。
- (6) 上都において行われた宗教論争を証明している華嚴寺の遺構。

5 元上都の評価に関する特徴

元上都の遺跡が世界遺産として評価されるに当たり、いくつかの注目すべき点がある。

(1) 資産範囲について

上都は、25,000ヘクタールを超える広大な資産範囲を有している。資産内は、それぞれの性格によっていくつかに区分され説明されているが、シリアル・ノミネーションではなくひとつの資産領域となっている。その中で際立った特徴となっているのが、セッティングである。セッティングは、文化的セッティング (Cultural Setting) と自然的セッティング (Natural Setting) とに分けて説明されている。

これらのセッティングについての概略は、2 元上都遺跡の概要 に示したとおりで、誤解を恐れずに言えば、文化的セッティングは特にモンゴル族の信仰の舞台装置を説明するものであり、一方、自然的セッティングは、草原の首都としての自然景観を説明するものである。しかしながら、文化的・自然的セッティングとされる面積は資産範囲のほぼ90%にあたり、面積的には資産の大部分を占めているといえる。

ICOMOS は、調査員による現地調査後の2011年9月11日付で、締約国に対して次の質問を送っている。

「なぜ、3か所のオボについては資産ではなく、緩衝地帯に含まれているのか。また、資産内のオボはどのように選択されたものであるか。」

これに対する締約国の回答は、以下のとおりである。

「オボは、この地域の様々な場所に構築されている。そのため、上都の遺跡の文化的セッティングの要素としての特徴を持つものの、それを資産の実体として見ることはできない。しかも、それらの起源に係る年代を決定することは困難で、また、現在においても絶えず変化している。

12のオボを選択した理由としては、それらが代表的なものであり手つかずのまま残っているということだけではなく、それらのオボを結ぶことによって、資産のセッティングとしての特徴を示すのに十分であることによるものである。」

また、自然的セッティングに関して言えば、付属資料 A として推薦書として提出された写真・図約200頁のうち、3分の1強が自然景観に係る写真であり、元上都の遺跡に不可欠なセッティングとして視覚的に説明していることを伺うことができる。

これらの説明によって、ICOMOS の評価書においても、セッティングを資産とすることについてそのまま追認している。(顕著な普遍的価値の属性に関する記述 (2)、(5))

(2) 評価基準について

締約国が推薦書において提示した評価基準 (ii)、(iii)、(iv)、(vi) については、そのまま ICOMOS によって認められたが、評価の内容については多少の相違が認められる。

評価基準 (ii) に関しては、推薦書では「生活様式」の価値観交流に重点が置かれているが、ICOMOS は、その価値観と生活様式が「都市計画の型」に反映されているとする。

評価基準 (iii) に関しては、推薦書が結果としての文化の内容を強調しているのに対し、ICOMOS はフビライ・ハンの傑出した統治によって生み出された文化・文明であることにも力点が置かれている。

評価基準 (iv) に関しては、推薦書の記述内容がそのまま評価されているが、ICOMOS の評価はより具体的な形状に即して、漢族の中庭とモンゴル族の景観を取り上げている。

評価基準 (vi) は、推薦書の評価と異なる部分が多い。特に、推薦書において強調されていた13世紀におけるマルコ・ポーロの著作と19世紀におけるコレリッジ (Coleridge) による詩の意義はICOMOSからは評価されていない。また、セッティングとしてのオボ及びその信仰が、この評価基準として認められているか否か明らかではない。

6 まとめ一都市造営の観点における元上都と平泉との関連

元上都と平泉では、その繁栄の時期に150年の違いがあるものの、両者ともその盛期がわずかに100年足らずで、政治行政上の中心的役割が終わった段階で、「荒廃」したという共通点を有している。そのため、最盛期の遺構が地下に良好に遺存することとなり、そのことが、世界遺産の真実性として十分に評価されている。以下、比較の観点について要約する。

(1) 立地に関して。上都では風水を重視したことが歴史記録等に表れている。この立地が、漢族の価値観によるもので、モンゴル族の価値観である草原景観と融合し、世界遺産として評価される内容となっている。

一方平泉では、風水に関する史料や金石文も存在し、立地に関する要因として理解することも可能であるが、そのことと複数の「民族間」の価値観の交流についての議論はなされていない。

(2) 設計に関して。上都では漢族の規範に則り、宮城、皇城、そして外城の三重構造をとり、それぞれ四周に城壁を巡らしている。宮城内は主として宮殿及び官衙が、皇城内には寺院などの宗教施設が作られるなど、重要度に応じて同心円的に施設が配置されている。主要街路は城門と主要な建物を結び、城内を方形に区画しているが、主要街路間の小規模な道路は自由に設計されている。

平泉においては、その造営に当たって当初から明確な都市設計があったとは考え難いものの、結果として、居館と複数の寺院を核とし、その間が主要街路によって結ばれるという、多核的な構造に仕上がっている。

(3) 都市の防御について。上都においては宮城、皇城において城壁、堀のみならず監視台や稜堡が人工的に構築されるなど、高い防御性を見ることができる。

平泉においては、三方を川、一方を山という自然地形が防御機能を担ったと考えられるほか、居館が堀及び土塁で囲まれて、政治行政上の拠点施設が外部から保護されていた。

(4) 都市の近郊域について。上都では東西南北の近郊域において、それぞれ城内を支える穀倉や商業施設、道路、軍事機能などを担う施設が歴史記録と考古学的調査の両面から明らかにされている。これらはいずれも城壁の外側に一定の範囲で広がっているが、その境界は必ずしも明瞭になっていない。

平泉においては、近郊域がどのように定義づけられるか、今後の検討である。現段階で、比較的近郊域としての性格が明らかなものは、中尊寺の経済基盤としての骨寺村荘園である。

(5) いわゆる都市民について。上都では、東側近郊域に官人、貴族層の家屋が不規則に配列され、

西側近郊域に商人層が集住していたと考えられている。外城、皇城、宮城内は支配者層や宗教者に係る施設が配置されている。

平泉においては、現段階で市民層に係る明確な遺構は議論されていないが、寺院や居館の周辺に分布する小規模な遺構について市民層との関連を探る見方があるほか、衣川流域北岸に交易的空間を見出そうとする説も出されている（斉藤2014）。

（6）宗教・信仰について。上都では、モンゴル人の基層的崇拜がオボに代表される遺構として上都都市域周辺の文化的セッティングを構成している。都市内部においては、特に仏教と道教の交流が著しく、皇城内に遺構として残存するとともに、チベット仏教拡散の契機となっている。

平泉では、仏教のなかでも浄土信仰が強く意識された施設配置が行われるが、それ以外の仏教的要素の反映も少なくない。さらに、日本古来の在地信仰と強く結びつく可能性のある鎮守社などが、中心域の境界としての機能を含めて配置される特色を有している。

以上の概略を、表4にまとめる。

表4 「都市」造営の観点における元上都と平泉との比較

	上都	平泉
時代	13～14世紀（1260～1368）	11～12世紀（1095頃～1189）
立地	風水が重視	風水という考え方もある。
都市域	<ul style="list-style-type: none"> ・同心円的に三重に城壁が廻り、<u>範囲が明瞭に認識される。</u> ・宮城（皇帝・貴族・官人）、皇城（寺院）、外城（祭場、禁苑）でそれぞれが機能区分される。 	<ul style="list-style-type: none"> ・現段階では範囲が不明瞭。（物理的には、三方が川で、一方が山で区分される。） ・同心円的というより複数の寺院と居館が<u>多核的に散在。</u>
都市を構成する施設	<ul style="list-style-type: none"> ・宮殿、楼閣 ・寺院（仏教、道教、儒教、イスラム教） ・倉庫 ・中庭、街路 ・天幕宮殿、禁苑 ・<u>城壁（区画施設）</u> ・<u>門（出入口施設）</u> 	<ul style="list-style-type: none"> ・居館（行政府を含む） ・寺院、神社 ・倉庫 ・庭園、街路 ・生産関連施設（陶器窯、瓦窯、鑄造関連） ・聖なる山（都市造営の基点的機能） ・廟
近郊域	<ul style="list-style-type: none"> ・役所、市民 ・宿泊施設、食堂 ・商店、商品庫 ・軍人の駐屯地 ・運河 ・聖なる山 ・墓域 	<ul style="list-style-type: none"> ・荘園 ・境界施設？ ・交易港？ ・祖先崇拜施設？ ・居館？ ・商業施設？ ・墓域？

注

- 1) 最近の考古学的調査は、「推薦書」4a. Present State of Conservationを参照のこと。
- 2) ICOMOSは、城域北側の羊等の放牧・飼養地（Wuyi Breeding Farm）の地域住民を、遺跡の保護管理に関与させるよう勧告している。現状では、動物が城域内へ侵入しないよう、柵が設置されている。

参考文献

- ICOMOS 2008 ‘Hiraizumi – Cultural Landscape (Japan)’ “Evaluations of nominations of cultural and mixed properties to the World Heritage List, WHC.08/32.COM/INF.8B1”, pp.63-76, <http://whc.unesco.org/en/documents/9949>
- ICOMOS 2011 ‘Site of Xanadu (China) No.1389’ “Evaluations of Nominations of Cultural and Mixed Properties, WHC-12/36.COM/INF.8B1”, pp.108-125, <http://whc.unesco.org/en/>

documents/116681

State Administration of Cultural Heritage of People's Republic of China 2010

“Site of Xanadu World Heritage Convention Cultural Heritage Nominated by People's Republic of China”
<http://whc.unesco.org/en/list/1389>

魏堅 2005 「元上都城址考古学研究」『蒙古史研究』第8輯 pp.86-115

翟禹 2013 「元上都研究綜述（1994～2012年）」『廣播電視大學學報（哲學社會科學版）』no.167 pp.74-80

岩手県教育委員会・一関市教育委員会・奥州市教育委員会・平泉町教育委員会編 2014 『日本都市史のなかの平泉—平成25年度「平泉の文化遺産」拡張登録に係る研究集会報告書—』

齊藤利男 2014 『平泉—北方王国の夢』講談社選書メチエ、東京

佐藤嘉広 2013 「平泉の「都市」計画と園池造営」『平泉文化の国際性と地域性』東アジア海域叢書第16巻
pp.167-188、汲古書院、東京

原田淑人ほか 1941 『上都 蒙古ドロンノールにおける元代都址の調査』、東亜考古学会、東京

図版出典

図1：State Administration of Cultural Heritage of People's Republic of China (SACHPRC) 2010

AnnexC T-01 The Location of the Heritage Site in China と T-02 The Location of Xilinguole League
に加筆作成

図2：SACHPRC2010 T-20 The Nominated Property and the Buffer Zone に加筆作成

図3：SACHPRC2010 T-07 The Distribution of the City Remains に加筆作成

図4：SACHPRC2010 T-10 Archaeological Exploration of the Palace, the Imperial and the Outer City に加筆
作成



写真1 南側近郊域から北西方向
の山容
(風水思想に基づく立地の
根拠とされる)



写真2 上都川
南側近郊域から明德門の
間
(風水思想に基づく立地の
根拠とされる)



写真3 一棵樹墓域
哈登台オボから北西方向
を望む
(遠景、手前の平坦地が放
牧地)



写真4 皇城南辺の城壁と明德門跡
(南から北方向、城壁手前の低地が堀)



写真5 宮城南辺城壁と南門跡



写真6 宮城内中心建物跡
(大安閣、遠方の高まりが基壇)



写真7 外城北壁内側の禁苑方向
(遠方の高まりが外城北壁)



写真8 西側近郊域
(外城西壁の外側)



写真9 鉄幡竿運河跡
(左側の低み、遠方の山頂に哈登台オボ)



写真10 哈登台オボ
(遠方の山頂、外城域北
西隅から)



写真11 哈登台オボ
(信仰の際は、3周する。
登山者が石を積み上げ
る)



写真12 哈登台オボから南西方
向。平坦低地部の柵は遊
牧動物の侵入を防ぐため
に設置